

## 第1部：講演2

## 独立系ジャーナリズムの可能性

— IWJ (Independent Web Journal) の社会的役割 —

Possibilities of an Independent Journalism

— The social role of IWJ —

岩上 安身

## 【経歴】

大学卒業後、出版社に就職して編集者となる。退職後、週刊誌記者を経て、1987年よりフリージャーナリスト。ソ連の崩壊とロシアの民主化の実像を描いた『あらかじめ裏切られた革命』（1996年）により、第18回講談社ノンフィクション賞受賞。2000年からフジテレビ系『とくダネ!』のレギュラーコメンテーター（～2011年6月まで）をつとめるなど、テレビ・ラジオの出演多数。取材・執筆フィールドは、政治、国際関係、経済、事件、医療・社会保障問題、思想・宗教問題、家族問題、少子高齢化問題、文化、スポーツなど多岐にわたる。近年はインターネット・メディアに力を注ぎ、自らIWJ (<http://IWJ.co.jp>) を主宰し、Ustreamでのインタビューや記者会見の中継、デモや社会運動の可視化など、Twitterでも情報を発信し続けている。

## 【要旨】

今回の「原発震災」においては、大手メディアが真実を伝えない一方、インターネット・メディアの活躍が目立ち、そこで伝えられている内容も、テレビや新聞とはまったく異なります。報道を巡る構造はまったく自由ではないことが、国民に知られつつあります。日本では未だに独立したメディアがないことを知り、改めて、独立系メディアの重要性と必要性が浮き彫りになったといえます。また、このような対抗的ジャーナリズムにおいて、情報ツールが非常に役に立つものであることも明らかとなりました。そのような状況の中でのIWJの活動を紹介します。どのような情報ツールを使ってジャーナリズムを展開できたか、どのようなことを伝えることができたか(大手メディアとどこが違うのか)、どのような影響を果たすことができたのかをお示しすることにより、独立系ジャーナリズムの社会的役割について考えていきます。

## 1. 既存マスメディアの構造と国民が発信する権利

みなさんこんにちは。ジャーナリストの村上安身です。インターネット・メディアのIWJ (Independent Web Journal : <http://IWJ.co.jp/>)の代表もしております。今、伊藤先生のお話をお聞きしましたが、大変示唆に富んだお話で共感するところも多く、私がお話したいなと思っていたこともいくつか、より精緻な言葉で語っていただきました。少し伊藤さんのお話も前提にしながらお話をさせていただきます。と思います。

今日私が頂いたお題というのは、独立系ジャーナリズムの可能性ということです。これは多分、大資本から独立したメディアということと、インターネット・メディアなどの新しい技術的な基盤を持つメディアという要素が加わって、オルタナティブなメディアの可能性という話をしてくれという依頼ではないかなと思います。こうしたオルタナティブなメディアが際立つようになったのは、やはり3.11以降の社会変化というのが大きな影響を与えていると思います。3.11以降、既存メディアというものの限界が露わになったという指摘があります。このシンポジウムはそういう意識を多分共有しながら、進んでいくのだろうなと思います。

ちょっとここは峻別しなければならないと思うのですが、この「3.11」という大震災は二つに分かれると思うのです。地震津波をめぐる情報の伝え方と、原発震災のその伝え方ははっきりと峻別しなければいけない。

災害情報だけであつたら、地震津波による被害について、それをスピーディーに正確に伝え、その後の避難や、避難をめぐるの困難ということに関しても、既存メディアは恐らく大きな批判をされることもなく、それまでの社会的役割、社会的な機能を果たしていたと思います。地震津波に関して既存メディアは大きな失態、あるいは情報の歪曲とか操

作とか隠蔽とか誘導をしたらどうか。私が気づいていないだけかもしれませんが、特に悪さをしていないと思います。

ところが、原発の報道に関しては、歪みに歪めた情報を行政・アカデミズムとある意味一体になって流して来ました。情報を誘導し操作し隠蔽してきた。そういうことは否めないだろうと思います。この違いははっきり認識しておかなければいけない。

ということは何なのか。原発をめぐる情報というものに何かしらの問題がある。タブーがあるということになります。ここも二つに分かれます。原発そのものの危険性、放射能そのものの危険性、この問題がありますが、もう一つ露わになったのは、そうした危険な原発を丸抱えてこの社会の中に抱き込んできた社会の仕組み、政治であり官僚であり財界であり学界であり、そして時に司法も、そして何よりも既存メディアの仕組みです。

既存メディアというのは、その原発を抱え込む社会構造から独立していない。既存メディアというのはその構造の一部である。彼らと一緒になのです。原子力村という言葉が使われましたけど、まさに村の一員です。東京電力から金をもらっていない、広告費をもらっていない大手メディアはほとんどない。巨額の広告費の前には時に膝を屈することがあるというようなことが明らかになってしまいました。

ですから、何とはなしに既存メディアはおかしいというのを、少しずつ分けて分析していくと、こういう大きな社会の枠組み、そしてその社会の枠組みは、健全で正常で透明で公正であれば良いのですけれども、そんなものではどうやらないらしい。非常に危険なもの、しかも不採算なものを抱え込んで、天として恥じない。国民の利益、権利、人権、生命、財産をないがしろにしている。こういう日頃の建前とは違う本音を持っていて、ネットワークが築かれているということです。そ

れが明らかになりました。そういう意味では、既存メディアの本質というのは大変深刻なことです。

先ほど、自明であるものが自明でなくなったというお話がありましたが、既存メディアの問題性は、私達にとってはむしろ自明なことであり、そうした認識を多くの人と共有出来るようになったということです。こういう大きな商業メディアの枠の中に、我々もいったん加わりながら仕事をしてきたのですから。

では既存メディアの構造というのはどんなものなのか、その特性とは何かということを申し上げますと、排他的な記者クラブ、一種の情報を独占するカルテルがあります。そのカルテルの存在によって編集権を独占してしまうということ、情報を一元化してしまうことに、その構造の特性があります。日本の異常な大手メディア支配の本質は、ここにかなりの程度集約されています。記者クラブ問題というのは、上杉隆さんが頑張っただけであちこちでこの問題についても啓発されてきましたし、私も及ばずながらそうした問題を明らかにしようと試み、その延長線上で自由報道協会の設立にも関わりました。いたるところでこの記者クラブ問題を問題視する声があるようになりました。だいぶ認識が広まったかなと思います。

我々国民は、記者クラブ制度を一切承認したこともないですし、事前に相談を受けたこともない。なのに、税金を使ってどこの省庁でも出入り出来る自由な特権を持ち、行政の一次情報をいち早く手にすることが出来る。それが記者クラブ・メディアの力の源泉なのです。そして手に入れた情報を操作的に出す。それを素直に公正に国民に開示してゆくというのならともかく、これは知らせる、これは知らせない、これは小さく扱う、これは大きく扱う、そうした操作を行います。厄介なことはそれを横並びでやります。NHKから民

法に至るまで、それから朝日新聞から産経新聞に至るまで、そう大きく伝える内容が変わらないということは危険なことです。

私達 IWJ は、3.11 当初、私と若者一人二人しかいなかったのですが、とにかく大地震が起きてすぐに、震災と原発について、中心部に居ながら報道できることは何か、考えました。被災地へ飛ぶという方法もありましたが、水もガソリンも食糧も足りない時に、現地へ行って、被災地の人が必要な水や食糧をとり、ガソリンを購入することはためらわれました。なので、被災地へ飛ぶのではなくて、我々は自分達の資力・労力を全部都心部に集中しようとして決めて、記者会見にへばりつきました。東京電力の会見など 24 時間放送し続けました。その当時はずらっと並んでいたテレビカメラの三脚が、今は、3 台しか立っていません。3 台とはどこかという、1 台がうちの IWJ のカメラ、もう一つがニコニコ動画、もう一つが全ての地上波の代表カメラです。NHK から民放各社すべてがまとまって 1 台でやっています。彼らはあつという間に、カメラを一つに束ねたのです。効率的と言えば効率的ですけども、情報の多様性を求めて、独自取材を積み重ねるのが、報道の本来の姿のはずです。皆さんも、マスコミは他社を出し抜いてスクープを狙って、違う紙面、違う番組作りに日々、切磋琢磨している、こういう幻想を持っていらっしゃる方も多いかもしれませんけれども、実際の姿はかなりかけ離れたものです。とにかく特落ちをしない、ということが、彼らにとって一番大事なことです。みんなで一緒に、みんなで同じものを流せばそれでいい。そういう状態になってしまっています。

彼らは国民の「知る権利」を独占している訳です。国民の「知る権利」というのは我々のものなのですけれども、平然と、記者クラブ・メディアの皆さんは、国民の「知る権利」を我々が代行していると言い張ります。頼ん

だ覚えはないと言っても、我々こそが代行していると非常に勝手なことを言います。これこそ非民主的な存在そのものです。

いろいろな情報が入って来ます。その情報を何らかの形で縮約して適切にまとめて伝えなければいけません。ジャーナリズム、報道にはそういう縮約の機能というのがありますけれども、そういう縮約の機能をどうするかということも編集権なのですが、その編集を自分達がやる。国民がやるのではない。どの情報は重要でどの情報は重要でないか。どの情報は知らせる必要がないとか、どの情報は価値があって意味があって、あるいは、こっち側の情報に誘導するためにもこの情報を伝えるというようなことに関しての判断は、我々が行うと言います。その我々というのは、またこれが新聞社独自でもなかったりするのです。行政と資本の都合というものがそこに入り込んでいる。かなり不純な判断だったりするのです。

本当は国民が情報を自ら知ってかつ編集する、国民が情報の編集者でなくてはいけません。それが全くそういう構造になっていない。先ほどの伊藤先生のお話にも、情報の送り手と受け手が分離されている、これが近代の特徴的な機能分化であるというお話がありましたけれども、全く同感でした。マスメディアにおいては、情報の送り手と受け手は、必ず分離されてなくてはならない、そしてこの分離された状況は常に固定化されてなければならないという圧力がかかります。かかり続けます。国民の「知る権利」ということは、マスメディアにとっては、あくまでも自分達マスメディアが編集した情報を、あなたたち国民は「知る権利」があると言っているだけです。私達が教えることをあなたたちには読む権利があるということ、時にはその社説や論説に、国民は「従う義務」があるということであって、あなたたちが独自に取材し、知るということを、好ましく思っていない。私

達の頭を飛び越えて知ってはならないということ。それを飛び越えようとする、ものすごく高い壁を立てて妨害します。それは記者クラブの妨害であると同時に、あなた達は所詮送り手ではない、送る力はない、いつまでも受け手でいなさいという中で、国民の知る権利を言うのです。従って、国民が発信する権利というのが少しも声高に言われないうことがありません。

確かに近代では、この両者が分かれざるを得ない根本的な理由もありました。グーテンベルグの印刷機導入以来、誰かが大量に印刷したものが出回るようになった。一人が書いたものが多くの人に読まれることが可能になった。そうやって印刷メディアは大きくなっていく。パンフレットのようなものが作られる。それから書籍のようなもの、雑誌のようなものが生まれる。定期刊行物が生まれていく。その後に日刊の新聞というメディアが出来ます。

本当に新聞は近代の産物で、新聞というのが出来て来る段階で、初めて専門の記者というのが成り立って来ます。それまで専門の記者なんていうものはいません。近代以前は、いろいろな仕事をやり、いろいろな立場があり、いろいろな学問をやったり芸術をやったり、そういう人たちが自分の考えたことを書いていた。つまり兼業であった訳です。書き手は兼業でした。その兼業の状態から、だんだん取材して日々の出来事を伝えていく作業が独立し、専門の人間がやるようになった。専門の記者、日刊紙の記者というのが成立します。これが近代のジャーナリズムのある意味ではスタートだと思えるのですけれども、それは一方的に素晴らしい変化だったのかというと、そうとも思えない。

日本では専門の記者、先ほど伊藤先生のお話にもありましたが、朝日なら朝日という会社に入った社員がやるものだという事になっていますが、ある種の「身分」になって

いるのです。身分というものであって、ジャーナリストという仕事を必ずしも彼らがしているとは限らない。ところが外国に行くといくらでも兼業の記者はまだいるのです。それから、ジャーナリストであるけれども、今やっている仕事はこの新聞に寄稿することだけでも、前はあっちの新聞に寄稿していた、今度あっちの新聞に転職することになりそうだ、そんな記者は欧米でもロシアでもどこにでもあります。寄稿者は独立した存在です。そうでなくてはなりません。そうしたことが、この近代社会特有とは言いますが、異常なほど日本で、特に専門記者の特権的な身分制でも言うべきものが強まっている。そういう構造になっているということを指摘しない訳にはいきません。

ところが現在、そこから外された普通の人々、その情報を発信する構造から外れているとされていた人々、つまり一般の市民の発信力が、ネットの登場によって格段に高まりました。これまでは、例えば自分が何かを書いても、コピーをとったり、ガリ版印刷したりして、せいぜい100部200部の発信力しかなかった人が、やりようによっては何万人、何十万人という人に自分の言葉を届けていくことができます。自分が得た情報を届けていくことが出来る状態になりました。

これはぐるりと巡ってジャーナルという言葉の先祖返りをしているのです。ジャーナルという言葉は、フランス語でジューナルから来ていると言われます。ジューナルというのは航海日誌とか、日々の出来事を記録することで、個々人がそれを人に伝えることだったのです。今でいうとブロガーです。ジャーナリストというのは、本来はそれでよかったと思うのです。個々の局所局所で、自分が認知した事実というものを書き留めて人に伝えていく。局所の情報が遠くの人に届いていくということが、本当はジャーナリズムのスタート点にあるものであって、これからも追及し

なければいけないのです。

近代の、特に日本において異常なほどの身分制ようになってしまった、このような記者クラブ制度、そして大手のメディアが寡占資本によって支配されてしまうようなあり方、クロスオーナーシップも含めて、そういうものは見直されていかなければいけません。そういう構造にあってもノーマルな報道をしていたのならば、もちろんそれは評価しますけれども、3.11以降に明らかになったように、原発・放射能の危険性を正確に捉えず、歪んだ報道を繰り返して来た点を見ると、やはりこの構造自体もどうにかしていかなければならない。どうにもならないのならば、我々はこういう構造にかかわらないで、自分達で情報を取りに行き、発信し、交換していく手段をもち、そういう社会を我々自身で模索していかなければならないだろうと思います。

## 2. 情報の値段と情報の民主化

もう一つ、既存メディアを成立させていた構造があります。これはもっと大きいことなのですが、商品として個々の情報が売買されるということです。そういうマーケットがあるという前提が実は思い込みだったということです。

本当にビッグビジネスとして情報売買市場が成り立ったのは、やっぱり近代だろうと思うのです。それ以前の人たちは他に仕事を持っていて、商売にはならないが伝えるべき記録を書いてみたというようなものであっただろうと思うのです。ところが、専門で情報を伝えるようなビジネスが成立すると、今度はそこを食わしていかなければいけない。

日本のメディアが特にそうですけれども、新聞・テレビなどのマスメディアは異常なほど巨大な産業になってしまいました。読売1000万部、世界一の新聞とか言いますが、1000万部も売る必要はないし、読む必要性も全くないと思います。ああいう巨大さを

追求していった、人々に均質な情報を言わば強要していくようなシステムができあがってしまっている。それはある一定レベルの産業の装置ができ上がってしまったということです。そうしますと、この産業を維持し続けるということ自体が一つの命題になってしまいます。何が何でも、儲からなくていけなくなってしまった。テレビもそうです。地デジもそうです。

そうすると、今の時代に何が起きるか。実はマスコミはものすごい経営難なのです。それはなぜか。打ち続く不況、デフレによる広告収入あるいは読者・視聴者数の減少ということもあります。こういうことももちろん重なっています。もう一つの要因がインターネットです。15年前から本格化したと言っても良い、90年代半ばからの動きだとは思いますが、インターネットが登場することによって何が起きたかという、情報に値段が付かなくなってしまったのです。情報はどこにでも偏在するようになりました。情報は価格の付かないものである。相変わらず価値はありますけれども、値段が付かない。たとえ水のようなものです。ペットボトルの水は価格がついて売られています。一般的な水あるいは空気のようなもの、我々にとって欠くことのできない重要なものなのだけれども、どこにでも偏在してしまうがために値段が付かないものがあります。これと同じように、情報も、電子データとしてコピーされれば、一瞬にしてどこへでもいってしまう。これは大変な時代を迎えつつあるということです。

これはスクープだ、特ダネだ、この新聞を読まない駄目だ、そういうことがなかなか成立しないのです。無料でネットを見てればいい訳ですから。必ずネットにアップされますから。そしてスクープの記事だけ見たいのに、新聞を読むと余計な社説が書いてあります。そんなもの読みたくないと思っ

て読まされて、セットで買わなければいけない。セット販売なんていない、そのスクープの情報だけ見たいのならば、インターネットを見ていれば十分ということになっていますし、自分で個々バラバラに取り込んで、自分で編集していけば良いことになります。

新聞はもともと巨大な装置を必要とする産業です。巨大な輪転機と巨大な宅配網を維持しなければ、新聞で情報は届けられません。だからある一定以上売り上げが落ち込むと、経営が破綻になります。また、広告収入への依存が深まり、そのため、資本への従属はここ数年ものすごく強まりました。これはメディアの内部にいれば分かることですが、資本の要請に全く逆らえない。新自由主義の強まりと期を一にして、メディアはそうした資本の要請、資本の専制に対してプロテストする機能が持たなくなりました。重大な変化です。そんなものならメディアなんて価値がありません。資本の宣伝機関ならば、我々もそんなものに金を出して読む必要はありません。広告宣伝なら無料で見れるのですから。一切読むのをやめてしまうというのが、重要な賢い選択であろうと思います。けれども、マスメディアは横並びでそれをとにかく通してしまう。徹底的な洗脳をし続けていこうというような姿勢があります。そういうことで突破しようと今もしているのだろうと思います。

しかし商品として売買できなくなった情報、これは本当に悩ましい。私も売文屋として文字を何文字か書いて原稿料をいただいて、あるいはどこかで喋って出演料をいただいていた身としては、非常に悩ましく思いました。けれども、発想は転換できるものなんですね。今起きていることは実は情報の民主化ではないかとある時、気づきました。商売として考えたならば不都合なところもあるけれども、情報の民主化というのは、本来的には自分が求めていたことではなかったのだろう

かと考えると、非常に気が楽になりました。

情報が売買出来るためには所有できなくてはなりません。私はここにある情報を買うことによって、自分が独占的に所有するのではなく、お金を払う意味がない。ところが、本を買うのでも何でも、その本の内容なんてネット上にすぐアップされる。結局、情報そのものを買っていたのではなく、印刷されてきちんと製本されたオブジェとしての紙の塊を買っていたのだなということが、今になると良く分かります。情報というものに値段も付かないし、独占的排他的所有というのもほとんど難しいということになりますと、所有するのではなくて、やっぱり情報というのはお互いに共有するものだということ、それが明らかになってくると思います。売りつけるのではなくて共有するということです。それが非常に重要になってきます。そして市民が情報を発信する存在になっていくということです。情報の主権者になるということです。情報の民主化というのは、つまり情報の主権者になるということです。真の意味で、市民国民になっていくということになるのだろうと思います。これは革命的な変化です。

現状では、とにかく大手メディアと行政が一体です。行政こそは権力そのものです。そこに、資本によって懐柔されないメディア、一般市民による市民メディアといった様々な存在が割って入っていき、大手既存メディアと同じように同列に取材し、発信し、情報を更新していく。そういうことを積み重ねていくことは、結局独占的な情報の体制というものを、やがては突き崩していくことになるだろうと思います。

### 3. ネットメディアの特性

ネットメディアのことをお話していきたいと思います。独立系であるということとネットメディアは必ずしもイコールではありません。巨大な資本が入って、ほとんど寡占状態

である大手メディア以外、記者クラブに入っていないメディアはみんな独立系と言えるのですけれども、かつては、出版市場、出版界が圧倒的に担っていました。意欲的な試みが出版界にありました。

でも、私も元々出版界出身ですし、編集者出身なので本当に悲しい限りですけれども、ここ数年の出版界の沈滞ってというのは、目を覆いたくなるようなものです。一つには先ほど言った文字情報もネットで安く手に入ってしまうのでいらない。買わない人が増えて来てしまった。こういう問題があります。

もう一つは流通を牛耳られてしまった。取り次ぎ業者の寡占支配というのは、ひどいものがあります。今、出版社の編集者が企画を決めるときは、自分で新しいチャレンジな企画を考えるのではなく、必ず営業にお伺い立てます。その営業がさらにどこにお伺い立てるかと言ったら、トーハン・日販に代表される取り次ぎ業者です。そういった所は過去のデータを持っていて、過去の事例でこのくらい売れたから、うちが引き取るのは300しか引き取りません、などと答える。そうすると挑戦的な企画が成り立たなくなります。つまり新しいものが出来ない。新しい物が出来ないということは、自由出来ないということです。冒険が出来ない。チャレンジなことは出来ない。残念ながら出版界は本当に失速してしまっています。私も出版の世界の中でフリーのジャーナリストとして仕事をしてきたので、そういう状況は大変悲しいのですけれども、ここに全面依存してしまうと身動きがなかなか取れないことが現実にあるのです。

そうすると、消極的になってしまい、縮小・沈滞してしまった出版界の枠を跳びこして、エネルギー的な情報の媒体を何とか作り出す必要がある。あるいは、そうしたマーケットを作り出していかなければいけない。そういう時に可能性があるのはやっぱりネットで

す。

ネットメディアの中にもやはり様々なものがあります。ポータルサイトのニュース欄、既存メディアのニュースサイト、結局こういうものを見ているという人も少なくありません。そうするとネットがあっても、朝日新聞のところから取ってきたものを見ているならば、新しいものはなかなか出て来ないことになります。

一方、小所帯、小資本のいくつかのネットメディアが、今誕生しつつあって、それが独立系のネットメディアとして活動しつつある。ニコニコ動画は、例外的な大資本なのですが、あとは、うちIWJにしても、OurPlanet-TVにしても、ビデオニュース・ドットコムにしても小資本小所帯です。また、名前まで挙がらないけれども、市民の皆さんの立ち上げているブログや、市民の皆さんが意識的に取材しようという気持ちを持って出かけて行ってユーストリームを行ったり、ブログ等に掲載したりしている。そういうものが、少しずつではあるけど、大変な力をたくわえつつあると思います。

ではネットメディアというのはどんな特性を持ち得るのか。今のネットメディアはリアルタイムメディアとも言います。ネットと言ってもどんだん進化しているので、Twitterのようなリアルタイムのソーシャルメディアもあれば、ユーストリーム、ニコニコ動画もそうですが、ライブストリーミングもあります。このライブストリーミングが現れてから、ものすごく大きく変化しました。質的な変化が生じたと言っても良いと思います。これは非常に強大な武器だと思っています。私もネットメディアに手を染め始めたのは2年前です。そして本格的に、インターネットを駆使したメディアを立ち上げようかどうか、考え始めました。これまで通り、一人のフリージャーナリストとして仕事をし続けてゆくか、それともネットメディアを組

織するオーガナイザーの仕事をするか。どうしようかなと悩んだあげく、よし、新しいメディアのオーガナイズをやりたくて準備にとりかかったのは2010年5月。実際に会社を立ち上げたのは、2010年12月です。そうした決断ができたのは、ひとつには、リアルタイムメディアと称されるライブストリーミングが出てきたからです。

ユーストリーム等のライブストリーミングは、速報性という点では、他のメディアは絶対かありません。つまり、リアルタイムで中継する訳ですから、これより早いメディアはないのです。仮に勝ち得るとしたらテレビの生中継しかないのですけれども、ユーストリームには絶対に勝てません。なぜか。まずコストパフォーマンスが全然違う。極めて安く、しかも簡単です。スマートフォン一つで出来てしまう。どこでも中継出来てしまう。当然のことながら廉価です。誰でも中継出来ます。それゆえ、ものすごい機動性があります。どこかで何かが起こった。「ちょっと札幌の〇〇さん、現地へ行ってもらえませんか」という電話一つで、あるいはTwitterでDMを送るだけで、間に合さえすればすぐ現場に急行することができます。そんなことが巨大なメディアで可能でしょうか。クルー一つ出すと大変なお金がかかってしまいます。そんなことは現実的には無理です。かつ彼らには、その手に入れた情報を流すスペースが限られています。つまり、取材した素材すべてをテレビは放映することが出来ません。所詮、すべてを見せることができません。

報道メディアはインターネットに取って代って、テレビは次第に報道メディアではなくなっていくかもしれません。それから重要なことは、インターネットは、世界のどこからでも発信することが出来る。それによって、中心点がどこにでも生じうる。これまでは、情報というのは特権的な中心点からのみ放射されるもので、それを一般市民は受け取るの

みだった。こういう送り手と受け手の分離の構造があるということは、私も申しましたし、先ほどの伊藤先生もおっしゃられていたけれども、情報の発信点、中心点を市民の側から構築することが出来るようになる。その結果、情報の多様性とか多極性が生じます。

また、説明するまでもありませんが双方向性があります。インタラクティブ性があります。そして、リアルタイムで見せるということが一次情報と非常に重要な関係があります。録画ではやっぱり駄目です。何が駄目かという、そこに編集が入り得るからです。多くの人は、ナマの、一切加工していない情報を見たい。ナマの情報を見て、自分で判断したいと思っています。リアルタイムのものは編集できませんので、一次情報としてお伝えすることが出来ます。今ここで起こっている出来事、現実そのものに可能な限り近い形で情報が伝えられ、ナマの情報が知りたいという要求に応えられるようになっていきます。情報を伝える上での理想形に、一步、近くなっています。しかし同時に、それらの情報はどんどん集積していきます。その集積性と、そこから情報を手際よく再度引っ張り出す検索性もネットならではの事です。つまり、一般市民がオルタナティブ・メディアを持ち、支配的な巨大メディアに対抗して情報発信が出来るようになっていく。また、なっていくだけではなくて、こういう検索性とかリアルタイム性を考えていくと、既得権にまみれた既存メディアに対して、新興メディアが権力争いを挑み、彼らの力を奪い取って自分達が何か別の大きな権力になり得るのだ、みたいな、そんな陳腐な話ではまったくなくて、これは情報をめぐる人類の歴史上、特筆すべき大きな転換点にさしかかっているのだということが分かります。

#### 4. IWJの活動

我々IWJがこれまでどんなことをやって

来たかということをお話しします。私達は3.11以降、発災直後から、東電とか保安院とか、こういったところの中継を24時間やり続けました。そのため、いわゆるダダ漏れメディアであるというようなイメージが強いと思いますが、そういう機動性を大事に、一次情報を伝えていくということを、これからもやろうと思いますけれども、情報の多様性とか発信した情報の量も決して少ないものではなく、会社立ち上げて1年と言いましたけれども、その前からのものを合わせて、私達が日々配信してきた情報、中継のコンテンツが2000本以上もう既に集積されています。これからも続いていくと思います。1日に10本以上の中継配信を行うことは珍しくありません。それは今後もどんどん増えていくでしょう。

チャンネルも、どんどん増えまして、「国民の声を可視化する」というスローガンのもと、全国各地同時に生まれたバラバラの脱原発アクションを、マスコミが伝えないものですから、中継しました。とにかく日本人は声をあげない民族だと自分自身でも言っていたのですけれども、大違いで、デモも集会も日本中で起っています。プロテスターの声もあがっているのです。そのプロテスターの声を報じないことによって、自分達が認知できなくて、自分達がおとなしい国民だと思いこんでいる。そんなことありませんよということで、片っ端からやりました。6.11には100以上のアクションがあったのですけれども、その脱原発アクションをいっぱいやりました。93のエリアチャンネルをいっぱい開設しました。公式チャンネルも9チャンネル作り、10時間以上にわたるぶっ通し生中継というのをやりました。それから以降も、9.11も9.19もずっとこういったことをやり続けています。

どんどん量が溜まって行って、ある日気づきました。その日配信した映像の動画の総時間数、そしたら24時間を超えていたのです。

つまり私一人が見られないものになっているのです。そうすると、じゃあ今度はどうするか。ここは Twitter との組み合わせですけれども、これを見た人は猛烈な勢いで実況を行う訳です。実況ベースに要約していく人がいる。つまり、それぞれで編集して、要約・縮約・レポートをしていく訳です。それによって、全部の動画をリアルタイムで見られなくても、縮約された情報の中から見ていけば良いというようなことが起こって来ます。

また、こういう兼業の人達、すなわち、完全な専業のジャーナリストにはなれないし、なる気もないし、それぞれの生活や仕事をお持ちなのだけれど、情報の送受信という、非常に公共的な仕事に自分も係わりたいという、そういう気持ちをお持ちの方がたくさんいらっしゃるって、ボランティアで参加して下さったりしています。そういう人達に「中継市民」になってもらって、いろいろなところで中継市民の講座の開催をしています。

さらには、その動画を編集していく「編集市民」というのをやりだしています。動画を編集して、調査方法やあるいはドキュメンタリーの作れるような方向まで持っていこうということをしています。今 IWJ では「百人百話」という福島の人達のヒューマンドキュメンタリーと言いますか、オーラルヒストリーを取り続けて、私がインタビューし続けているのですけれども、それを毎日一人ずつ流しています。それからいくつかの調査報道ものあるいは報道検証ものもやっていこうとしています。

もちろん私は自ら一人のジャーナリストとして、同時平行で、自分自身で取材をして、メルマガで書いたりしています。例えば、横浜の港北区でストロンチウムが発見された。これスクープしたのは私です。東京都内3か所からも出た。これも私がやりました。そうしましたら、文科省からそんなものは出ていなかったと、またそういう結果を出されて、

これから文科省と対決するのですけれども、ただダダ漏れしていれば良いというものではなくて、論争を伴う、議論を伴う報道も実際にやっています。それを文字のメルマガレベルだけではなく、出来れば映像にして、しかもそれまでの経緯をきちんと編集して見せるスペシャルレポートとか、検証レポートとかというものも作って見せられるようにしていきたい。テレビの報道の枠内あるいは新聞の枠内では出来ない報道がある。ネットならば枠なんてどれだけでも広げられますから、スポンサーにおもねる必要もないですし、権力におもねる必要もありません。そのうちいじめられちゃうかもしれないですけど。ジャーナリズムがやれることは自由に何でもやってしまいたいと思っていますし、やれる人達、やれるメディアはこれからもどんどん出て来るだろうと思います。

けれども、お金はどうするの、という話が残ります。これは、思いがけないことだったのですけれども、ある日口座番号を教えろというメールがきまして、新卒の振り込み詐欺かと思ったのですが、そうではなくて、カンパしたいということでした。そんなことを言って下さる方が一人ではなく様々に現れて、ああそういうこともあり得るのかと逆に教えられました。商業的なメディアの構造の中で育ちましたから、情報は売買するものと思いきりで、分かっていなかったのですが、社会的な活動の分野では、非営利な組織が活動しています。福祉でも災害支援でも、たくさんの NGO, NPO が活動したりしています。そういう人達はみんなボランティアで、ドネーションで活動資金を調達しています。公共的な活動のためにドネーションで資金調達するというのは、少しもおかしいことではないとわかってきたので、出来るだけ活動資金についてはカンパなどを、お願いするようにしています。

ただ、それだけでは限界があると思うので、

2011年の12月にIWJ創立1周年を迎えるに当たって、サイトも全面リニューアルすると共に基礎的な会費を払ってくれる基礎的な会員によって、最低限の基盤はまかなえるような会員制システムを構築し、オープンにしたいと思っています。その上で、なお賛同して下さる方とか支えて下さる市民の方がいらっしゃったら、本当にありがたいことだなと思っています。そこから先、もちろん我々もスピンアウトする商品と言いますか、高いものではないのだけれども情報をそこそこのお値段でどうですかと提供しようと。先ほど情報はそのまま切り売りして商品にはなりえないと言いましたが、要約したものだったら手元に置きたいという人もいらっしゃる訳

で、そういうものを出していこうとは思っています。

雑ばくな話になりまして、未消化の方もいらっしゃるかもしれませんが、既存メディアの構造というものは、その歪みというものは存外に根深いものです。非常に深いものがあります。それに対抗するような独立した市民に支えられるメディアというものが、果たして成り立ち得るか。私らのやっていることは実験なので、どこまで出来るかどうか分かりませんが、試みていこうと思っています。ということで、現場からリポートさせていただいたような格好になりましたが、私の話はこのぐらいにさせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。